



Data

監督・脚本: ジョン・スー
 原作: ゲーム版「返校—Detention—」
 出演: ワン・ジン/ツォン・ジンフ
 ア/フー・モンポー/チョ
 イ・シーワン/リー・グァン
 イー/パン・チンユウ/チュ
 ウ・ホンジャン

👁️👁️ みどころ

“学園ホラーもの”たる本作の原作は、台湾で大ヒットしたゲーム「返校—Detention—」。時代は戒嚴令下の1962年。翠華高校の「読書会」に参加するヒロインの運命は如何に？

“政治モノ”としての拷問シーンにビックリなら、ダークミステリーとしての巨大な軍人の霊の登場にもビックリ！映像効果や音響効果もあって、怖さは相当なものだが、少し詰め込み過ぎ感も・・・。

『悲情城市』（89年）のような出来栄を期待してもダメだが、そのチャレンジや良し！



■□■原作はホラーゲーム！映画也大ヒット！金馬獎でも！■□■

私は本作について何も知らなかったし、原作になったというゲームについても何も知らなかった。パンフレットには、キャナ☆メン（電撃オンライン編集部）による2017年10月31日付「ゲーム評」があり、台湾で大ヒットしたゲーム「返校—Detention—」について詳しく解説している。テレビゲームなど一度もやったことのない私はそれを読んでもさっぱりわからないが、「detention」とは「引き止め、阻止、拘留、留置、拘禁、放課後の留め置き」の意味。つまり、そのゲームは1960年代の台湾を背景に、架空の舞台・翠華高校で起きた暗く悲しい出来事を描くホラーアドベンチャーゲームで、学校に閉じ込められた主人公は、謎と怪奇に満ちた校内を探索し、その真相を突き止めていくものらしい。本作が長編映画デビュー作となる若手の徐漢強（ジョン・スー）監督は、「ゲーム版『返校—Detention—』がリリースされたその日に私はゲームをクリアし、そのメランコリックで美しいストーリーに強く心を動かされました」と語っている。幸運にも愛するゲームの監督として起用された彼は、どんなスタンス（思想）でその映画化を？

「監督プロフィール&インタビュー」の中で彼はそれを詳しく語っているので、それは必読だが、ゲームとの対比などとてもできない私でもはっきりわかるのは、本作の政治色の強さだ。それも生半可な強さではなく、『悲情城市』（89年）（『シネマ17』350頁）や『牯嶺街少年殺人事件』（91年）（『シネマ40』58頁、『シネマ44』184頁）で描かれた、国民党政権下における、「白色テロ」がテーマにされているからビックリ！「三國志ゲーム」や「戦国ゲーム」のような“エンタメもの”がゲームとして楽しめるのは当然だが、台湾では「返校-Detention-」のようなもともと政治色の強いゲームがなぜ大ヒットし、その政治色を更に強調した本作のような映画がなぜ大ヒットしたの？

私にはそれがサッパリわからないが、スクリーン上には戒厳令下にある1962年の台湾で、翠華高校に登校する高3生のヒロインのファン・レイシン（方芮欣（ワン・ジン（王淨））や、密かに「読書会」に集っている、1年後輩のウェイ・ジョンティン（魏仲廷（ツォン・ジンファ（曾敬驊））、ホアン・ウエンション（黃文雄（リー・グァンイー（李冠毅））たちの姿が登場する。そんな中、登校する生徒たちをチェックしていた国民党のバイ教官（チュウ・ホンジャン（朱宏章））から突然「鞆の中身を見せろ」と言われたら・・・。

■□■白色テロとは？読書会がバシたら？まずその理解を！■□■

台湾は自由と人権を尊重する民主主義国だが、それはつい最近のこと。韓国も大統領は民主的な選挙で選ばれているが、それもつい最近のことだ。日本は1945年の敗戦後、それまでの軍国主義から民主主義国家に転換していったが、半島を南北に二分した朝鮮戦争後の韓国では、長い間軍事独裁政権が続いた。そして、台湾では、大陸から逃げ込んできた国民党が「外省人」として“内省人”を支配すると共に、1947年の二・二八事件から1987年に戒厳令が解除されるまでの間は、「白色テロ時代」が続いた。「白色テロ」とか「赤色テロ」という物騒な言葉を今ドキの若者は知らないかもしれないが、その知識は本作を理解する上で不可欠だからしっかり勉強してもらいたい。

本作冒頭のバイ教官のチェックによって、もし生徒の鞆の中に入っている『共産党宣言』が見つかったら・・・？3年生のレイシンも、2年生のジョンティンやウエンションも、教師のチャン・ミンホイ（張明暉（フー・モンポー（傅孟柏））やイン・ツイハン（殷翠涵（チョイ・シーワン（蔡思韻））が組織する「読書会」のメンバーだが、「読書会」って一体何？本作で彼らがその教材にしているのはタゴールの『迷い鳥たち』や厨川白村の『苦悶の象徴』だが、そこには何が書かれているの？読書会で彼らは何を勉強しているの？今の日本は最高に自由な国。したがって、「菅総理はバカだ！」と公言しても罪に問われることはないし、どんな本を読もうがそれは自由だ。しかし、戒厳令が布かれ、「白色テロ」が横行していた1962年当時の台湾では？

本作の原作がゲームであることにはビックリだが、本作を理解するためには、何よりも「白色テロ」を理解する必要がある。また、「読書会」に参加しているのがバレたらどうなるの？それを理解することも不可欠だ。

■□■ダークミステリーとしての面白さは？その評価は？■□■

夏は暑い。そこで、背筋をぞおっとさせ、冷気を感じさせるには、“怪談モノ”が1番。そのため、夏の映画には“ホラーもの”、“怪談モノ”が多い。その代表が「お岩さん」が登場する『四谷怪談』（69年）だが、さて、本作のホラー度は如何に？また、ダークミステリーとしての面白さは如何に？

私は怖いホラー映画は嫌いだから、基本的には観ない。本作導入部では、ある日、うっかり教室で眠ってしまったレイシンが目を覚ました後、ロウソクの光を頼りに廊下を歩くシークエンスが登場するが、それだけでも映像効果や音響効果もあってかなり怖い。レイシンがなぜそこで後輩のジョンティンと出会うのかはともかく、その後2人が教室で体験するさまざまな出来事は不思議なことだらけで、ダークミステリー色がどんどん強くなっていく。2人が教員室へ駆けつけると部屋は封鎖され、ドアの横に「国家の転覆をはかる地下組織が見つかった」という張り紙があり、チャン先生とイン先生の机が荒らされていたから、さあ大変。そこで、今度は「読書会」の会場として使っていた備品室へ行ってみると、そこでも椅子は壊され、ノートは破られ、誰の姿もなかったから、こちらも大変だ。しかして、これらはすべて夢？それとも現実？

本作は「キネマ旬報」8月下旬号の「REVIEW 日本映画&外国映画」で取り上げられているが、そこでの3人の評論家の評価は星3つ、3つ、2つとかなり低い。テーマの設定は面白いはずなのに、それは一体なぜ？しかして、あなたの評価は？

■□■原作の政治色を更に強烈に！その是非は？■□■

日本でも中国でも、“学園ホラーもの”は多いし、ホラーゲームもたくさんある。しかし、「白色テロ」という政治色を強調したゲームは、日本にはもちろん、「返校-Detention-」以前は台湾にもなかっただろう。そんなゲームを映画化するについて、ジョン・スー監督はその政治色を更に強烈にすることを狙ったそうだが、その是非は？

本作のヒロインとして登場するレイシンは、台湾の青春映画に数多く登場してくる女優と同じような美少女だが、ダークスリラーたる本作の節目節目に登場してくる“地獄の使者”のような霊（＝巨大な軍人の霊）はかなり異様な姿をしているし、かなり怖い。ジョン・スー監督の説明によると、原作には、伝統的な道教の要素が至る所に存在していたが、その映画化については、政治的な面と歴史的な面に焦点を当てるため、道教の衣装をやめ、登場人物にとってそれが象徴的に恐ろしい姿だということを、顧客が理解しやすいよう、その外見を軍人風の衣装に変えることに決めた、そうだから、その姿はあなたの目でしっかり確認してもらいたい。

「読書会」の参加者として逮捕された生徒への拷問、仲間の自白によるチャン先生とイン先生を含む「読書会」メンバーたちの逮捕と処刑。それらのシークエンスは『悲情城市』で観たものと同じだが、本作では“巨大な軍人の霊”が繰り返して呟く「共産党のスパイの告発は国民の責務・・・」のフレーズが耳から離れない。

「白色テロ」時代の台湾の実像については、パンフレットにある、若林正丈（早稲田大学台湾研究所顧問）の「台湾が『監獄島』だった頃 映画『返校』時代背景解説」を読めばよくわかる。そんな時代の翠華高校で「読書会」に集う生徒たちは、「自由が罪になる世界で僕らは生きていた」と語っているが、さて、今ドキの台湾の高校生はそれをどの程度理解し、実感できているのだろうか？日本の高校生にとって、それはかなり縁遠い世界で、かつほとんど興味のない世界だと思っている私には、出来の良しあしは別として、そんな政治色の強い本作が台湾で大ヒットしたことを高く評価したい。

2021（令和3）年8月13日記